



青年海外協力隊北海道OB会会長
山口 猛彦 さん
学校法人八紘学園
北海道農業専門学校野菜科副主任

私は、平成13年4月から約2年半、青年海外協力隊員として南米の内陸国パラグアイで活動しました。先頃、サッカー・ワールドカップで日本と対戦したあのパラグアイです。派遣が決まった時はまず世界地図で位置を確認することから始まりました。

パラグアイで野菜栽培を指導

野菜隊員として国立農業高校野菜科での活動がスタートしました。首都アスンシオンからバスで約4時間のパラグアリ県ウブクイ市から更に奥へ12km入ったところにある全寮制の学校です。校内の職員用住宅に住み、パラグアイ人の職員や学生と畑で野菜栽培実習をし、近隣農家も訪問しました。太陽が地平線から昇り地平線へと落ちてゆくのが見え、夜には満天の星が頭上を照らし、月と星の光で本が読めることを知りました。

野菜科で収穫された野菜は、寮生活を送る学生用に寮の食堂で調理されますが、ゆくゆくは生産量を増やして外部販売して収入を上げ、経費に充てるということが隊員の私に期待されていたことの一つでした。野菜はよく育ちました。先進国からの援助で化成肥料がたくさん保管されていました。それを使わなくても、近隣の牛飼いで野菜と物々交換で貰ったトラクター一杯の糞を畑に撒けば充分

でした。主に、リーフレタス・ニンジン・トマト・フダンソウ・タマネギ・食用ビートを栽培しました。野菜を食べる習慣があまりなく、定番の野菜以外は栽培しても受け入れられません。

ある時、大量のリーフレタスが収穫期を迎え、初めて外部販売をすることになりました。ウブクイの町を目抜き通りに縁台を設置したのはよかったのですが、季節は“冬”で、しかも曇り空のとびきり寒い日。南米といえども冬には霜が降りるくらい冷え込み、ただでさえ野菜を食べないパラグアイ人が、冷え切った煉瓦造りの家の中でレタスサラダを食べるわけがありません。初めての野菜販売は惨敗というほろ苦い思い出です。

技術移転は共感することから

パラグアイでは3回の冬と2回の夏を経験し、前任者から引き継いだ任地を3代目隊員へと引き継いで私の活動が終わりました。私自身の移転は上手いと思ったのですが、技術移転は難しかったです。派遣前は好き勝手にやらせてもらってきた私には「生活をする」ということが解ってなく、現地の「生活している」人たちにずいぶんと勝手をしてしまったのだらうと痛烈に思いました。これを知らずに人から人への技術移転は出来ず、察することが出来ても共感することが出来なければ、同じ目線にはならないのだらうと。

帰国して7年。結婚し2人の子供が生まれ、日々を積み重ねてゆく「生活」をしています。帰国後は、札幌市内の農業専門学校に再就職し、派遣前、そしてパラグアイの時と同じく学生達と一緒に野菜を作っています。また、青年海外協力隊北海道OB会や南米の日系移住者との繋がりを目的とした団体などで微力ながらお手伝いをし、パラグアイの活動で繋がった糸が切れないよう私なりの関わりを続けています。

青年海外協力隊 平成12年度3次隊派遣
職種:野菜
派遣国:パラグアイ

さっぽろ 研修員日記



意見を交換する
良いチャンスと
思いました

雑談も近いある日。お二人の背後はまだ雪の残る中庭

JICA研修員**タムマーウォン・スーマリー**さん(右)と
サイニャチャック・ポーンボンさん
(青年研修ラオス、地方行政コース、
2010年2月11日～27日、札幌国際センターで研修)

リーさん。一方、行政民間サービス庁地方行政部の職員であるポーンボンさんは「これからは人材育成が大事です。大学教育などを通じて専門家を育てていかねばなりません」ときっぱり。若いリーダーを育てることに力をいれているという。

ラオスってどんな国？

ラオスは、正式には「ラオス人民民主共和国」といいます。面積は24万km²でインドシナ半島の中央部にあります。人口約650万人で全体の60%を占めるラオ族をはじめ50近い民族が暮らしています。首都はビエンチャン。

熱帯モンスーン地帯に属しているので年間を通じて気温の高い国です。ラオスのJICA事務所で「札幌は寒い所と聞きましたが、研修に参加するのも“チャンス”なら、札幌で寒さを体験できるのも“チャンス”」と思ってやって来たというスーマリーさん。言葉のはしはしになんでも吸収しようという意欲と熱意が感じられました。



北海道経済部の担当者から
北海道の経済や観光政策の現状を聞く
(2月16日 北方圏センター・特別会議室)

「日本の長年の経験から 学びたい」

参加した研修は地方自治についてのコースで、「ラオスでも行政制度をよくしようと努めていますが、日本の長い経験には学ぶことが多いので今回の研修はチャンスでした」とビエンチャン人事部行政課の副課長を務めているスーマ



「北海道開拓の村」を視察



「であい」は北海道発の国際協力情報紙として、毎号、北海道内の国際協力に関する各地の取り組みや話題を掲載します。市町村、団体、小中学校、大学などで開催される行事、イベントなどの情報をお寄せ下さい。

(出版部 pbl@nrc.or.jp または国際協力部 intc@nrc.or.jpまで)